

IoTによる協働： 難民キャンプの実験圃場誘致と イモ類研究者育成

東京大学農学部環境資源科学課程国際開発農学専修3年 指原佑佳

背景

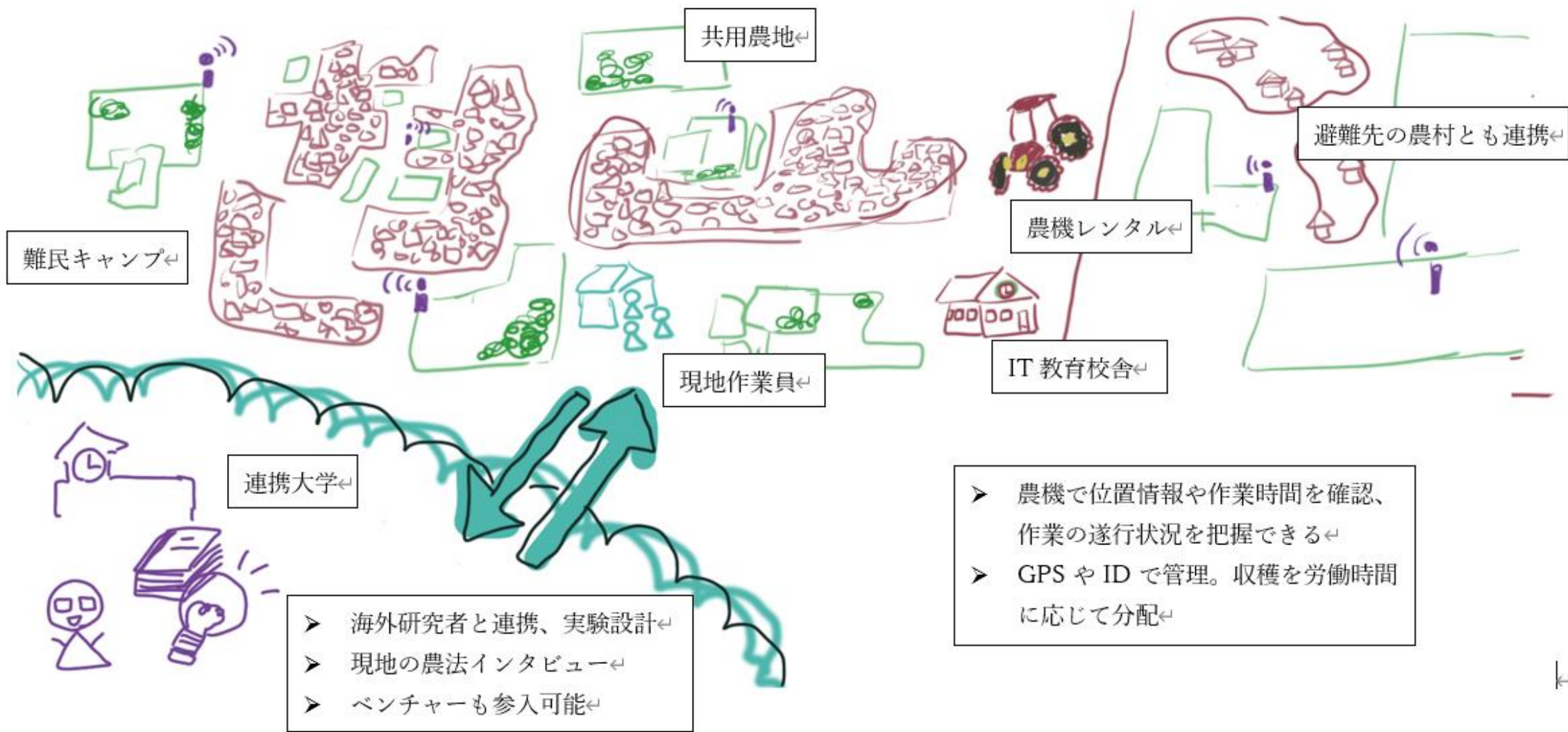
- イモのポテンシャル
 - 救荒作物（低温、干ばつに強い）→気候変動
 - アフリカ大陸での主食の一つ→人口増加への対応
- 現状：イモ類の研究不足
 - イネに比べ、国際的関心が薄い
 - 渡航困難地域では現地実験ができない

そこで…難民キャンプを実験圃場に

- IoTによるイモ類研究促進
 - 渡航困難地の気候での生データ取得！
 - 現地農家の聞き取り調査
 - 日本の研究者がイモ分野で大活躍
 - 国際協力の観点
 - 食糧自給 = 脱援助依存
 - 失業率改善 = 紛争予防
 - 共同圃場管理 = コミュニティ構築
(難民-難民、難民-受入先)
- 農村情報ネットワーク

- 渡航困難地での圃場試験を実現
- 分散した田畑のデータを収集
- 難民の元農家が現地作業員

- 共用農地を通じた農村情報ネットワークの構築
- 避難先農村と連携した IT 教育・関係構築
- 食糧自給・雇用創出による紛争予防



難民キャンプ

共用農地

避難先の農村とも連携

農機レンタル

現地作業員

IT 教育校舎

連携大学

- 海外研究者と連携、実験設計
- 現地の農法インタビュー
- ベンチャーも参入可能

- 農機で位置情報や作業時間を確認、作業の遂行状況を把握できる
- GPS や ID で管理。収穫を労働時間に応じて分配

活動報告①

- キャッサバ農家の見学
 - アフリカでの生産量が多いイモ
 - 国内生産をしている群馬の島田さま
 - 課題：病害虫・需要増加に対する増産



活動報告②

- 研究室でのリサーチ
 - Sack farming
- スラム地域での現地視察・関係構築
 - Kenya Kibera Slum

